

絶命の詞ぜつめいし（黒沢忠三郎くろさわちゆうざぶろう）

呼狂呼賊任他評 幾歳妖雲一旦晴

正是櫻花好時節 櫻田門外血如櫻

狂きやうと呼よび賊ぞくと呼よぶは他たの評ひやうするに任まかす

解説 自分のとつた行動に恥じるところなく、櫻田門外の桜のように見事に散つてゆくと詠っている。

語釈 ※詞し詩文の一般的な称。※幾歳きざい長年。

※妖雨示し妖はあやしい、わざわい。妖雲とは日をさえぎる雲。井伊直弼をたとえていった。

※一旦いつたんひとたび。※正是せいしときはちようど。

※好時節こうじせつ桜の咲く好い季節。

幾歳いくさいの妖雲よううん一旦いつたん晴はる

正まさに是これ櫻花おうかの好時節こうじせつ

通釈 自分達のことを狂人と呼ぼうと乱賊と呼ぼう

と、それは、他人の評するままにしておこう。日をさえぎるあやし気な雲のように、長年の間、幕政をほしいままにしていた井伊直弼を姥たばした今は一時に空も晴れ渡つたような気持ちだ。時はあたかも桜花も咲き乱れようとする時節である。決行の場も丁度櫻田門外であり、飛び散る血も桜のようであった。

櫻田門外血は櫻の如し